



『白の袷の上に、薄紫の柔らかな上着を重ねて、
華やかではお（ん）姿は、ひどく可愛らしい、なまなよした感じで、
と、いうですぐれたとお（ん）けど、ほっそりとしなやかに、
ものを言う気配は、「ああ、いじらしい」とただただ可愛おす。』
「夕顔」の巻より

ものあはれ源流(の旅)

言霊の国日本―「ことば」はその土地の独特の気
候風土が育んだ感性によって紡がれたものです。
複雑で微妙に移ろいゆく京都の自然は当然そこに
住む人々の心に影響を与えた。

平安の時代、物語はもともと読むものではなく
聴くもので、語りの担い手は高位の女官「女房」で
した。千年の昔京都で生まれた源氏物語を「今女
房」が京ことばで語ることに、より、気候風土のもた
らす発想の息吹そのものが「音」となって響いては
消えるその中に、源氏物語の底に流れる「もののあ
はれを」くみ取っていただけることを願います。

女房語り 山下智子

山下智子プロフィール

京都市出身。仲代達矢主宰無名塾に学び、三島由紀夫近代能楽集「道成寺」
「熊野」はじめ舞台・TVにて活動。2003年より声の表現中心に活動。
NHKラジオドラマにレギュラー出演と作品提供、朗読劇、映像番組、文楽人
形芝居での語り、電子辞書、大修館書店国文教科書CD等での朗読。
「京ことば源氏物語」の女房語りを通して、失われゆく美しい京ことば、やま
との心を後世に伝えるべく各地で語り会をひらき国内のみ
ならず海外でも好評を博している。
<http://www.genji-kyokotoba.jp/>



国文学者・中井和子先生について

氏は生粋の京女。府立大学で中古文の教鞭を執りながら十五年の歳月をかけて
源氏物語全五十四帖を今から百年程前の京ことばに全訳されました。失われつつあ
る京のことばや感性を後世に残すために源氏物語と相応しいものはなかった
と、一人の京都人として誇りに思っています。2009年1月永眠。

あらすじ

帝の御子でありながら臣下となった源氏の君は、亡
くなった母桐壺更衣にそっくりであるという藤壺の女
御に思いを募らせる(第一帖 桐壺)。雨夜の品定め(第
二帖 帚木)で中の品の女に興味を抱いた源氏は、方違えに
こと寄せ忍んだ空蟬に、再び逢うことを拒絶される(第三
帖 空蟬)。

十七歳の源氏はある日、夕顔の花咲く粗末な家に住まう
たおやかな中の品の女・夕顔に出逢う。お互いの素性を隠
して逢ううちに源氏は女にのめり込む。一方、源氏の年上
の恋人である六条御息所はお通いが絶えたことに苦しみ、
忍びきれない情はついに月をも隠し、二人が一夜を過ごす
六条辺りの某院にものけとなって現れ、夕顔をとり殺し
てしまう。

源氏の忠臣惟光の働きにより夕顔の遺骸は秘密裏に東
山の寺に運ばれ、表沙汰となることは免れたが、若い源氏
の悲しみは深く、夕顔の侍女右近を自邸二条院に引き取り
亡き夕顔を偲ぶのだった。

洋画家 吉田緑 プロフィール

1959年京都市出身、亀岡市在住。
武蔵野美術短期大学中退。自宅で児童美術教室を主宰
後、2003年より全国のデパート等の画廊を中心に
作品を発表。
誰しもが花々を目の前にして感じる美しさや香りな
ど、また動物たちの生き生きとした表情は、どちらも
生物として魅了され、自分自身も癒されながら描いて
います。



「バラの香り」

最近では野鳥を追い求めて里山へ行くことで
「森の自然の中に自分を同化させる」心地よさを享受
しています。



ものあはれ源流(の旅) 中井和子現代京ことば訳 源氏物語より(大修館書店刊)

第四回「四帖 夕顔」

●女房語り 山下智子

令和五年

七月十六日(日)

開演 午後二時・四時(開場午後一時半)

吉田緑 作品展は座敷にて午後十二時より

場所 鏡智山 大圓寺 本堂 亀岡市西町十一 0771-2210993(当日のみ)

料金 三千元(要予約)

定員 四十名(椅子席)

蓮の花咲く大圓寺

一五五三年に開山された大圓寺は
明智光秀が亀山城を築城するときに
合わせ穴太道の要衝の現在の地に
移転されました。

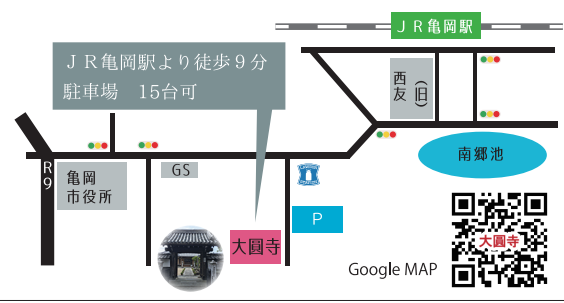
一五九二年当時の亀山城主小早川
秀秋により「亀山五ヶ寺」に定め
られました。

寺宝である「鉄仏薬師如来像」
は平安時代末期から鎌倉時代初期
に造られたと推定され、亀岡市指
定文化財に指定されています。
境内に咲き誇る幾多の蓮の花を愛
でながら「京ことば源氏物語」を
お聴き下さい。

お申し込み・お問い合わせ



こちらの問合せフォームからお申込み下さい。
0771・24・2168
ゲストハウス舞舟



- ◆主催 舞舟源氏物語の会 ◆協力 II トラスト・ジャパン
- ◆音響 II 蓑田毅 ◆展示協力 II 洋画家・吉田緑
- ◆後援 II 亀岡市・かめおか霧の芸術祭実行委員会